第 87 号
（創刊：1994年12月15日）

Hirosaki University Hospital Bulletin　弘前大学医学部附属病院広報

南塘（なんとう）だより

発行：弘大病院広報委員会
（委員長：伊藤悦朗副病院長）
〒036－8563　弘前市本町５３
TEL：0172－33－5111（代表）
FAX：0172－39－5189
http://www.med.hirosaki-u.ac.jp/hospital/

※南塘とは，弘前市史によると医学部敷地内にあった南溜池のことをいう。

2017年（平成29年）9月20日

病院長からの一言
～熱意がハシゴを作る～

弘前大学医学部
附属病院長　福田 眞作

「ハイブリッド手術システム」を本院に整備すべく現在準備が進められています。病院長を拝命して２年目の私のミッションの一つをクリアする目処がたち，平成31年春の稼働を目指しています。今回の計画によって手術室が一つ増え病院の機能がさらに充実する反面，職員の負担が増えることになります。多職種の職員の皆様のご理解なくして実現できないミッションです。この計画に賛同いただきました関係各位に感謝を，そして場所の移転等をお願いすることになりましたスキルアップセンター，院内学級，医療安全推進室，感染制御センターの皆様方には，心からお詫びと感謝を申し上げます。

昨年，大熊洋揮脳神経外科教授と富田泰史循環器内科教授（当時は准教授）から，「ハイブリッド手術システム」整備の要望を受けました。この「ハイブリッド手術システム」未設置の都道府県は47都道府県中わずか３県（青森県，秋田県，新潟県），未設置の国立大学病院は42病院中５病院（弘前大，秋田大，新潟大，東京医科歯科大，群馬大）しかないとのこと，循環器疾患や脳神経外科領域のいくつかの疾患に対する治療は本システムで実施するのが標準であり，本県の対象となる患者さんをやむなく県外（岩手，仙台）へ紹介しているとのことでした。県内唯一の特定機能病院であり，青森県の医療の最後の砦である本院としては，早急に整備すべき設備であると理解できました。

しかしながら，検討を始めるといくつも課題があることがわかりました。なかでも難題は「購入費用の確保」と「新たな手術室のためのスペースの確保」で，いずれも解決策がみつからないまま半年以上が過ぎました。諦めかけたその時，私には考えつかないような２つの解決策（予算，スペースの確保）を設置検討メンバーから提案いただき，一気に視界が開け導入が実現する運びとなりました。

「才能ではなく熱意がハシゴを作る」という松下幸之助（松下グループ創業者）の名言があります。病院職員の「どうしても，何とかしてでも，二階に上がりたい」という熱意（もちろん才能も皆さんあります）が，二つのハシゴを思いついたのだと思います。これからも職員の皆さんと一緒に，熱意をもってより良い病院作りを実践していきます。引き続き，職員の皆様方のご協力を宜しくお願いいたします。

各診療科等の紹介
【糖尿病代謝内科】

糖尿病代謝内科は，内分泌内科と協力して診療にあたっており，スタッフと医員 21 名で主に糖尿病・脂質異常症・膵臓疾患・内分泌疾患を受け持っています。患者数の急速な増大が社会的な問題となっている糖尿病などの代謝疾患と，高い専門性が求められる内分泌疾患を守備範囲としており，新患患者数は年間約 900 名で，紹介率は 95% を超えています。

青森県の平均寿命は全国で最も低い水準にあり，短命県返上は重要な課題となっていますが，その大きな要因の一つが糖尿病です。糖尿病の治療は，「薬を内服していればそれで良い」というものではありません。その病状は生活習慣と密接な関わりを持っています。当科では８名の糖尿病学会専門医が，約 1,900 名の外来糖尿病患者さん（うち１型糖尿病 110 名）の診療を行っており，さらに看護師が療養指導やインスリン自己注射手技の指導，薬剤師が服薬指導，管理栄養士が食事指導を，ひとりひとりの生活やニーズに合わせて行っています。入院症例に対しては多業種によるチーム医療体制を構築しており，その糖尿病教育プログラムにつきましては，2015 年に附属病院診療奨励賞をいただきました。

近年の糖尿病治療は日進月歩で，新たな薬や検査が次々と開発されています。

当科でも，患者さんへの負担が大幅に軽減された新型・低価格の持続血糖測定装置や，インスリン持続ポンプ療法など先進的な治療を積極的に取り入れ，大きな治療効果を得ています。しかし現在，問題となっているのが，糖尿病を有しながら治療を受けていない人が多くおられるということです。厚生労働省の調査によると，糖尿病と言われたことがある人のうち，約半数の方は適切な治療を受けていない状態にあります。このような観点から，当科では地域の皆様への糖尿病啓発活動や，医療スタッフの育成にも力を入れています。

我が国の５人に１人は糖尿病を有しています。また，その合併症は全身に及ぶことから，当科はおよそ全ての診療科と関わりを持っています。糖尿病は自覚症状に乏しいため，患者さんも，そして時には医療従事者も対応が遅れがちになります。糖尿病治療は先手必勝，初期の対応がきわめて大切です。血糖値が高めの方がおられましたら，お気軽にご相談ください。

（内分泌代謝内科学講座　村上　宏）

新任科長の自己紹介

放射線科科長　放射線部長　青木　昌彦

平成 29 年７月１日付けで放射線科科長，放射線部長を拝命いたしました。就任にあたり自己紹介を兼ねてご挨拶を申し上げます。

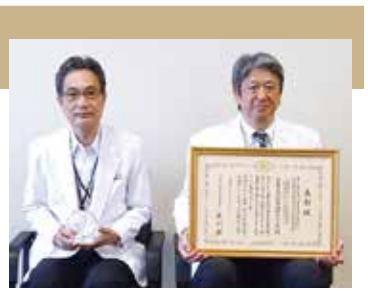
私は神奈川県藤沢市の出身です。横浜の聖光学院高等学校を経て，弘前大学医学部に進学しました。大学卒業後は，悪性腫瘍の診断と治療の両方を専門的に研究する放射線医学に惹かれ，弘前大学医学部放射線科の大学院に進学しました。その当時の教授でありました竹川鉦一先生の指導を受け，大学院では「レーザー血管形成術」に関する研究を行いました。その後，阿部由直教授，髙井良尋教授のもとで，放射線部副部長として臨床と教育を中心に弘前大学医学部附属病院で仕事をして参りました。弘前に来た当時は津軽弁の理解に相当苦しみましたが，かれこれ 34 年，現在は通訳や字幕なしにほぼ理解できるようになりました。

放射線科では，X 線 CT，MRI（磁気共鳴断層装置），放射性医薬品を用いた核医学検査による画像診断ならびに血管造影とインターベンション（カテーテルを用いた治療），各種がんに対するリニアックによる外部照射，小線源を用いた腔内照射や組織内照射，放射性医薬品を用いた核医学治療などを行っております。現在，16 名の放射線科医が在籍しておりますが，安全で質の高い放射線医療を提供することが我々の責務であり，それらを通じて，地域住民の皆様の健康と福祉の増進に貢献することが目標です。それらを達成するために，関連各科，関連機関と密接に連携し，放射線医療の更なる充実に努めて参ります。

放射線部では，最新鋭の医療機器による低侵襲かつ高精度の診断と治療を提供するべく，37 名の診療放射線技師が 24 時間体制で勤務しております。日中の業務はもとより，医療機器の日々の点検，ならびに定期的な品質管理を徹底することにより，医療機器の安全管理に努めております。

今後も最新の放射線医療を提供し，地域医療の充実に邁進して参ります。皆様方のご指導ご鞭撻ならびにご協力のほど，よろしくお願い申し上げます。

薬剤耐性対策推進国民啓発会議議長賞を受賞して



「薬剤耐性（AMR）対策普及啓発活動表彰」は，薬剤耐性（AMR）対策の普及啓発活動を広く募集し，優良事例を表彰することで，対策に係る自発的な活動を喚起奨励すること等により，対策の全国的な広がりを促進することを目的として創設され，本年が第一回選考でした。私共，「青森県感染対策協議会（通称 AICON ＝ Aomori Infection Control Network）」の「感染制御ネットワークによる地域医療圏の耐性菌を減らすための多面的アプローチ」が優れた活動として認められ，74 件の応募の中から，最高賞の「薬剤耐性対策推進国民啓発会議議長賞」に選出されました。６月 26 日に国立科学未来館において，議長である同館館長の毛利衛氏から表彰状と盾を授与されました。

AICON は４年ほど前に，青森県において感染制御に携わる実務者（医師，看護師，検査技師，薬剤師，など）の情報交換の場として発足しました。立ち上げには，青森県と弘前大学，附属病院，そして青森県内の医療施設の皆様から多大なるご助力を頂き，発足後もたくさんの参加施設の皆様に熱心に活動を展開して頂きました。事務局は，本院感染制御センターに置き，現在 30 余りの医療関連施設が参加しています。AICON は，参加施設で検査される細菌検査情報を共有して分析するシステム（MINA）を有し，事務局より細菌分離状況や抗菌薬感受性の推移について定期的に報告を行っております。また，ウェブページを通じた感染制御関連の研修会などの情報提供や，マスコミを通じた市民啓発も行っております。AICON の運営母体は本院になりますが，舞台で活躍するのは青森県で感染制御に携わる多くのスタッフです。今回の受賞は AICON 活動に取り組んできた，全てのスタッフの活動が認められたものです。今後，今回の受賞を励みに，質の高い感染制御を目指して，さらに努力を重ねていきたいと思います。

今後とも，皆様からのご支援とご鞭撻をお願い申し上げます。

（感染制御センター長，
青森県感染対策協議会会長　萱場広之）

先憂後楽

働き方改革

病院長補佐　小林朱実

少子高齢化社会・労働者人口の減少等の問題への対応，そして経済政策の一つである「一億総活躍社会の実現」に向け，「働き方改革」は最大のチャレンジとして，今この五文字を見ない日はない位の勢いで進められています。特に長時間労働の是正や一人ひとりの労働生産性の向上，今までの考え方を抜本的に見直した働き方，テレワークなどの新たな発想などが提案されています。長時間労働の是正は今まさに私たちが抱えている課題でもあります。また，2017 年４月には厚生労働省より「新たな医療の在り方を踏まえた医師・看護師等の働き方ビジョン検討会」の報告書が公表されました。報告書では，「需給・偏在の現状」，「高生産性・高付加価値」への転換，医師・看護師等の仕事の一部を多職種へ委譲する「タスク・シフティング」や，一つの仕事を複数で分担する「タスク･シェアリング」と，「フィジシャン・アシスタントの創設」などが推進方策の一つとして提言されています。報告書については様々な議論も巻き起こっています。率直な感想としては，疑問符も残りますが，働く人の立場・視点で多様な勤務形態等の労働環境と労働生産性の観点からの提案になっており，今後ビジョンの具体策は将来に希望が持てるものになってほしいと思います。そのためには，報告書を機に自分たちの組織は自分たちで組織の価値観や役割に合致したイノベーションを考える必要があると思います。それぞれの組織において，働き方改革実現化に向けた議論を行う必要があると考えています。職員一人ひとりが自分たちの問題として認識し，色々なアイディアを出し合い，自ら変革していく組織を目指していければと願っています。地域の皆様へ最高級の医療を提供できる組織であり続けるために，職員が高いモチベーションを維持でき，能力を最大限発揮できる環境と自己研鑽し専門性を向上できる組織を職員全員参加で作ることができればと思っています。５文字が流行語で終わらないように，また報告書が次世代を担う医療者の希望となりパラダイムシフトとなることを期待したいと思います。読んでない方はぜひ一読されることをお勧め致します。

第27回日本臨床工学技士会 Best Presentation Awardの若手奨励賞を受賞して

５月20日，21日に青森市にて第27回日本臨床工学会が開催されました。本学会は全国から2,500人を超える臨床工学技士を中心とした医療関係者が集う学術集会であり，発表演題数は500演題を超える学会となりました。その数多くある演題の中から若手奨励賞に選んで頂きましたので報告します。

演題名は「皮下植込み型除細動器におけるエキスパンダーを用いたノイズ評価方法の開発」です。この研究に至った経緯として，ある患者の手動草刈りハサミを使用した草刈り作業中に発生した皮下植込み型除細動器の不適切作動の経験があります。この不適切作動が起こった原因を精査したところ，新しく発売された皮下植込み型の除細動器は従来の経静脈植込み型除細動器と比べ，植込み部位が異なることから，筋電位の影響を受けやすく，これまで一般的に行われてきた筋電位干渉試験では不十分な可能性が考えられました。そこで実際に手動草刈りハサミを用いて再現実験を行なったところ，周期的な動きから心室細動の様な不整脈の再現性が得られたため，それに代わる動きとして運動器具であるエキスパンダーを用いた評価試験を開発しました。草刈りハサミのような周期的な動きは日常生活の中でも歯ブラシや皿洗いのように潜在しています。今後は皮下植込み型除細動器を植込む患者様にエキスパンダーを用いた本試験が広く行われ，除細動器の不適切作動が少しでも減少することを期待しています。

本受賞に関して不整脈先進治療学講座の佐々木真吾准教授をはじめとした循環器内科の先生，臨床工学部のスタッフにご指導頂きましたことを感謝申し上げます。

（弘前大学医学部附属病院臨床工学部
現 青森新都市病院臨床工学科　冨田瑛一）

ベストやまびこ賞の表彰授与

栄養管理部

呼吸器内科

第一病棟5階

「投書」と聞いて，皆さんは何を思い浮かべますか？多くの方は「苦情」や「物申す」などの悪いイメージを持たれているのではないでしょうか。本院では，外来診療棟１階の中央待合ホールの掲示板でその内容・回答を貼り出しています。

投書内容を拝見してみますと，怒りに満ちて不満を爆発させたもの，冷静沈着に周りを見渡して建設的な意見を述べているもの，そして自分が受けた治療や看護，スタッフの言葉掛け等に対して感謝を述べているもの等様々あります。昨年度１年間で191件（27年度290件），その約20%が感謝の投書となっています。

感謝の投書は，患者満足度が高まることによる病院のイメージアップにも繋がります。また，何よりも現場スタッフの気持ちの大きな励みにもなっていることと思います。

全ての投書に目を通している福田病院長から，感謝の投書が多かった診療科等に対して感謝を伝えたいとのことで「ベストやまびこ賞」が創設され，そして，表彰は現場に出向いて行うこととしました。今回受賞されたのは，診療科では呼吸器内科，病棟では第一病棟５階，中央診療部門等では栄養管理部となりました。受賞された部署からは「受賞が励みになった」との声も聞かれ，モチベーションも更に向上したのではないでしょうか。

今回，受賞されなかった診療科等においても，感謝の投書は寄せられています。次回の「ベストやまびこ賞」をたくさんの皆さんが受賞されますことを願っております。

（医事課）

弘前ねぷたまつり

津軽地方の伝統行事「弘前ねぷたまつり」が８月１日から７日間行われました。弘前大学のねぷたも大学と地域住民との交流を図ることを目的として，１日，３日，５日の３日間参加し，昭和39年に初参加以来，連続54年の出陣を果たしました。

１日には，附属病院外来診療棟正面駐車場において，小児科に入院中の子供達や保護者，医師，看護師，事務職員等による「小型ねぷた」が運行されました。本学はやしサークル「弘前大学囃子組」等による太鼓と笛の音にあわせて，子供達は「ヤーヤドー」と元気な掛け声を響かせ，津軽の短い夏の夜のひとときを楽しんでいました。

（総務課）

七夕・納涼祭り

【七夕飾り】

７月３日から10日まで，正面玄関の一角に七夕の笹竹を用意しました。

笹竹の前を通る方々に思い思いの願い事を込めた短冊を飾っていただきました。用意した短冊が足りなくなり，何度も補充したところ，たくさんの願い事が笹に飾られました。

毎年のことではありますが，患者さんやそのご家族と思われる方々の短冊の願いが胸に響きます。そして，その願いが天に届き，叶いますようにと思っています。

【納涼祭り】

７月27日午後４時15分から，病院正面玄関横で「納涼祭り」を開催しました。

入院中の患者さんに，ご家族やお友だちと一緒に「宵宮」のような雰囲気を味わっていただきたいという思いで，「ヨーヨーつり」，「スーパーボール・光りものすくい」，「千本つり」，「つり大会」等を用意しました。

まず，色とりどりの風船の中から，お気に入りの色の風船を選んで持っていただき，その後，光るうちわ，光る腕輪を手にしてから，思い思いのゲームの場所へ。ヨーヨーつりやスーパーボールすくいでは，何回も挑戦している様子，また，千本つりでは狙った景品を見事に当てた時のうれしそうな表情が印象的でした。

また，今年は福田病院長，小林看護部長，川村事務部長に弘前大学の法被を着ていただき，祭りを盛り上げていただきました。

普段は病室で宵宮を告げる花火の音を聞いている患者さんに，その雰囲気を味わって楽しんでいただくことが出来たのではないかと思っております。

運営に協賛してくださった団体や企業，また，準備・運営・後片付けに協力してくださったスタッフの皆さんには，この場を借りてお礼申し上げます。

（医事課）

栄養サポートチーム（NST）の活動紹介

NSTとはNutrition Support team（栄養サポートチーム）の略で，本院では平成19年４月に発足しました。チームのメンバーは，医師，看護師，薬剤師，言語聴覚士，臨床検査技師，管理栄養士など多職種で構成されています。

NSTの役割は，適切な栄養管理がなされているかの確認や，患者さんに最もふさわしい栄養管理法の提言，栄養管理上の問題や疑問の解決，早期の退院やQOLの向上，栄養に関する知識の啓発などです。

患者さんの栄養状態は治療に大きく関わってくるため，年齢，身長，体重，病態に応じて栄養アセスメントを行い，患者さんに適切なエネルギーや栄養素を管理していきます。そして，経過を確認しながら栄養を維持・改善することで治療効果を高め，早期の回復を進めていきます。

NST介入が必要な患者さんは，栄養不良の方はもちろん，栄養不良が予測される患者さんも対象となります。例えば，急激な体重変動のある方，食欲不振や嚥下障害，摂食機能の低下で食事摂取量が少ない方，血清アルブミンが3.0g/dL未満の方，治療によって栄養摂取の低下が予測される方などです。

現在は入院患者さんを対象にしていますので，病棟でこのような患者さんがいらっしゃいましたら是非，NSTに介入をご依頼ください。ご依頼いただいた患者さんは，週１回主治医や担当看護師とNSTメンバーでカンファレンスを行い，栄養介入していきます。患者さんにあった食事形態の選択や食事摂取量を増加させる工夫，栄養補助食品や静脈栄養，経腸栄養剤の選択など栄養に関わることを適切に調整いたします。

栄養管理はすべての患者さんにとって基本的な医療ですが，患者さんの病態は一人一人異なり，必要なエネルギーや栄養素も異なります。NSTでは患者さんに最良の栄養管理が実践されるよう，これからも活動を続けていきたいと思っています。今後ともNST活動にご理解とご協力をよろしくお願いいたします。

（栄養管理部　三上恵理）

弘前大学医学部附属病院へのご寄附，心より御礼申し上げます

ご氏名の掲載をご承諾いただいた方に限り，ここにご芳名を掲載させていただきます。

今号では，平成29年5月から平成29年7月末までの間にご入金を確認させていただきました方を公表させていただきます。

（経理調達課）

寄附者ご芳名　齋藤　久樹 様

【 編集後記 】

南塘だより第87号をおとどけします。原稿をお寄せいただきました皆様には，心から感謝申し上げます。

この夏も例年通り，“ねぷたまつり”が盛大に行われました。ゆく河の流れは絶えずして，しかももとの水にあらず（鴨長明，方丈記）。同じようであり，同じではない。一見当たり前の様なことの繰り返しにも，そこには日々の努力，積み重ねが必要です。

大学病院の収益は，右肩上がりであるが，“それで良”としていると，明日は同じではないかもしれない。同じように発展していくには，昨日とは違う取り組み，変化が必要です。皆様方の意欲が増すように取り組んで行きたいと思いますが，発展に向けて，建設的なご意見を頂きたくお願い致します。

（病院広報委員　大門　眞）